
異世界に行こう！

pange

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界に行こう！

【Nコード】

N2067Z

【作者名】

pange

【あらすじ】

苛酷な社会人生活に嫌気がさした新井大次郎は、ある日、全てを捨てて異世界へ船出した。異世界には見たこともない奇妙な生物はいるし、人語を操る高等生物までいたりする。果ては不思議な力を操る原住民がいて、彼らは余所者に対して敵愾心旺盛ときている。

そんな環境で、社会から逃げた大次郎の、若い御隠居生活は、はたして成功するのだろうか。

なーんて感じで始まる冒険ファンタジック物語。

第0話 社会人脱落

ある意味、平凡極まりな家に生まれ、小学校、中学校、高校、大学と、特別レールを踏み外すことなく無難に過ごしてきた青年、新井大次郎は、社会人になってまもなく絶望のどん底に叩き落とされることになった。

連日の大残業、そのくせ、ろくに残業代はつかない。休みは不定期で、しかも休みの日もやむことなく職場から連絡が入るので、全く休んでいる気にならない。大学時代、あれだけ好きだった携帯電話も、今では見るのも触るのも嫌になり、着信音が鳴り響いただけで心臓が止まるような緊張を覚えてしまう。拳句の果てに、一年で二度もある、転居を伴う転勤……。

希望も何もかも失い、これが四〇年も続くのかと思うと、死んだ方がマシじゃないかと、そんな風に思ってしまう大次郎であったが、いざ死のうと思っても、できない。怖いのだ。いつそ仕事を辞めて転職するという手もある。

だが、転職先が今よりマシである保証は全くなく、逆に悪化したら最悪だという被害妄想に駆られて結局行動に移せない。無職に対して言いようのない憧れと羨ましさを抱くものの、収入のない日常貯蓄を切り崩して生活していく状況を思い浮かべると、その将来性のなさに絶望して結局、二の足を踏んでしまうのだ。

そんな新井大次郎は、上司の逆鱗に触れた。度重なる彼の失敗に、上司が切れたのだ。

切れる理由は、分からないでもなかったが、上司や同僚や後輩の目の前で、散々罵声を浴びせられた彼のプライドはずたずたとなり、意気消沈した彼は、次の日、仕事にいかなかった。職場には、風邪を引いたと嘘をつき、度重なる会社からの連絡も完全に無視して寮

の部屋に閉じこもっていた彼は、インターネット上に面白い団体のホームページがあることに気づき、その夜、静かに部屋から飛び出した。

そのホームページの題名は、

『世捨て人募集中』

というものであり、その内容は、南海の無人島にて悠々自適な御隠居生活を楽しもう……というものであった。

車を飛ばし、ホームページ上に記された目的地を目指す。途中で必要なものをコンビニやホームセンターで買いそろえた彼は、夜の十一時になってようやく到着した。集合時間は、十一時十五分であったから辛うじてギリギリセーフといったところ。

目的地は、港で、そこには一隻の船が用意されていた。

主催者曰く、

「こんな下らない世の中に執着する必要はありません。我らは、新しい土地で、新しい世界を構築し、のんびりと暮すのです。楽ではないかもしれませんが、プレッシャーはありません。誰からも罵声を浴びせられるようなことはありません。理不尽に頭を下げる必要もないのです。自分の力で生きていくのですから、自分以外の誰にも卑屈になる必要性はないのです」

それは、集まった多くの社会からの脱落候補者の耳に響き、共感を覚えさせた。

集まった人間の多くは、社会の厳しさを前にして挫折した若者で、日々死にたいと思ってしまうほど追いつめられた人々である。死にたいが、結局死ねない。だが、この厳し過ぎる現実からは逃げ出したい。そんな若者たちにとって、この試みは、まさしく渡りに船であった。

「自分の帝国を、自分の手で作るんです。誰にも邪魔されず、誰にも怒られず、誰にも頭を下げる必要性のない、自分だけの帝国を自分の手で作りましょう！」

主催者が絶叫を張り上げると、希望を失った若き社会人たちは「

おおおおう」と喝采で答えた。

そして船が出る。

大次郎は甲板の上で、購入したばかりの缶ビールで静かに祝杯をあげていた。

明日以降、大次郎は職場を無断欠勤することになる。上司たちの反応は見ものだが、もはや、あんな下らない社会に戻る気はないので、どうなるうが知ったことではない。散々自分を苦しめた罰を思い知るがいい……などと笑いながら、大次郎はぐびぐびと勢いよくビールを飲んだ。

「お、いい飲みっぷりだね。自棄酒かい？」

するとそこに響くは、女の声で、大次郎が静かに振り返ると確かにそこには一人の少女の姿があつた。

「違う。祝い酒だよ」

きっぱりと反論する大次郎に、

「私にもちようだい。お金は払うから」

少女はそう言ってちょこんとその場に腰を下ろした。

「いいよ、金は。どうせ使えないし」

たった一本のビールに執着するほど、大次郎はケチではない。だが、少女は見た感じ、未成年である。だとすると、法律的に問題があるように思われたので、「君、未成年？」と、一応確かめてみた。すると、

「うん。私は、こう見えて十八歳。でも私たちは日本って国を捨てたのよ。自由人なのよ。法律なんて関係ないわよ」

なぜか堂々と胸を張る少女だった。

そんな彼女を前にして大次郎は困ったように苦笑いしてから、「好きにしろよ」と投げやり気味に吐き捨てた。

「で、名前は？」

しばらくして、大次郎が尋ねると、

「春菜。武田春菜」

ビールにつまみ。大次郎が持ち込んだいろいろなものに容赦なく手を伸ばし、ぱくぱくと口の中に放り込んでいく少女は、そんな風に名乗ってにつこりと微笑んだ。

「食い過ぎだろ」

と、大次郎は文句を言う。

「気にしないで」

春菜は意に介する風もない。

「気にする。それはいざつてときの大切な食糧なんだぞ」

「いざ？ ははは。食糧なんて、島で確保すればいいじゃない。無人島たつても、何にもない砂漠のと真ん中とは違うじゃん」

なぜか自信満々な春菜である。

大次郎は呆然としつつ、このままでは全部食べつくしてしまいかねない彼女から、貴重な食糧を奪い取り、フウと静かに深くため息を吐いた。

「それはそうと、私たちこれから共闘しない」

「きよ、共闘？」

「そ。共闘。どうせ一人だけで生きていくのは土台無理じゃない。仲間も大勢いすぎると面倒なだけだ。ど、二人ぐらいなら、互いに助け合えるし、良い案なんじゃないかな」

そう言って武田春菜は大次郎の手を掴む。

一方の大次郎は、困惑しきりである。

一人で生きていく。そう決めて、今回参加を決意したのである。あらゆる人間的しがらみから逃げ出して、自分の力で生きていく。社会人として、人との付き合いでさんざん苦労した彼には、それが一番の幸せであるように思えたのだ。

それなのにこの少女は、一緒に力を合わせて生活していこうなどと言っている。

面倒極まりない話だと、邪険にしてもよかったのだが、しかし一方で彼の心はこう訴えていた。二人ぐらいならば、いいんじゃない

か、と。一人暮らしも、今は大丈夫でも次第に話し相手がいなくて耐えられなくなってくる可能性がある。その時になって困るよ、今のうちから話し相手を作っておくのは得策であるように思われたのだ。

まあ、自分の口から仲間を募るのは億劫だ。

しかし、武田春菜は自ら仲間になりたいと言ってきた。これに無碍にするのは、何となく勿体ないような感じがしたので、

「そこまで言うなら勝手にしろよ」

まるで恩を着せるかのように言ってから大次郎はそっぽを向いた。

数日が過ぎて、

島が見えてきた。

変哲のない、普通の島であるが、主催者曰く無人島とのこと。

大次郎は荷物を整理し、春菜とともに下船準備を整えている。新たな生活に、新たな日常に対する期待感に膨らむ一方だ。どこを住处にして、どうやって生きていこうか。大変だろうが、社会人として客に怒られ、上司に怒られ、同僚や後輩に憐れまれる生活を送るよりは遙かにマシだ。

そして船は島に到着する。

大勢の社会人脱落者たちが下船した後、主催者は必要最低限の物資を置いて、静かに島から離れていった。

第1話 最初の一步は雨の味。

晴れ渡る空に、透き通る海。

そして、その後ろに広がる、大樹海。

ここが、社会のレールから飛び降りた人間たちの終の棲家となるのだ……と思うと、大次郎の気持ちは不思議と高鳴った。

もう誰からも怒られない。

もう誰からもバカにされない。

もう誰の目も気にする必要がない。

とりあえず歩きだす。

森の中に入り、まずは住处を探すのだ。できれば川沿いがいい。

それでいて、いざというときに身を守る場所。さらに言うと、食糧から近い場所であればなおさらOKである。

が、そんな好都合な場所はそうそうあるものではなく、大次郎と春菜の二人は、島に降りたってから半日ほど、ずっと森の中を歩き通しであった。

「ないね」

と、春菜が言わずもがなの台詞を吐くと、

大次郎はそれを平然と無視して先へ進む。

まあ、余り先へ進んで迷子になるわけにもいかないのです、目印を残しながら、慎重に進むので、結果的にそれほど進んでいるわけではない。

「お腹減らない？」

不意に春菜はそう言って、自らが背負うリュックサックの中からおもむろにお菓子の袋を取り出し、大次郎の前にちらつかせた。

「別に俺は減ってない。食いたきゃ自分で食ってるよ」

大次郎の反応は相変わらず冷たく、突き放したような雰囲気満ちていたが、春菜は春菜で意に介する風もなく、

「じゃ、いっただつきまーす」

ニコニコと笑いながら、封を開け、中に入っているスナック菓子を美味そうに頬張るのだった。

「食べる？」

「いらん！」

「ほんとに？」

「ああ」

「やせ我慢は体に良くないわよ」

「別にやせ我慢してるわけじゃない」

「ふーん。じゃ、全部食べてもいいの？」

「ああ、勝手にしろ」

大次郎は面倒臭そうに吐き捨てた後、その場にドシツと腰を下ろしてフウと静かにため息を吐いた。それにしても、行けども行けども、森だらけ。木、木、木、また木。いい加減、うんざりしてきたが、まだまだ森の呪縛からは解放されそうにない。

こういうとき、大次郎は能天気極まりない武田春菜と言う少女の性格が羨ましく思われるのだった。既に大次郎は、もしこのまま住むに値する場所を見つけられなかったらどうなるのだろうかという不安を心の中に抱きつつある。社会人として挫折してしまった経験が、彼に嫌な予感だけを告げていく。

しかし春菜は、そんな不安とは無縁の世界に生きているようだった。

その時、

グウウウウウ。

どこからともなく、情けない音が響く。

それは新井大次郎という青年の体が出した、正当な悲鳴であった。そして、それを聞いた春菜はしたり顔で、

「食べる？」

と言つて性懲りもなく再びスナック菓子を差し出した。

大次郎がちらりとそれを見ると、彼は案外減っていない袋の中身

に驚いた。いずれにしても、空腹には違いがなかったので、彼は御言葉に甘えて、袋の中に手を伸ばし、二つか三つほど掴むと、口の中に放り込み、ばりばりと噛み砕いた。

塩味が、ほどよく効いていて、実に美味しい。学生時代はよくコンビニなどで購入し、食べ歩いていたものだが、社会人になって以後はほとんど食べていなかったお菓子という存在。改めてその美味さを実感するとともに、これからはこんなものも自由には食べられなくなるのだらうなと思うと、改めて自分の決断に迷いが生じてしまう大次郎なのであった。

「あ、雨」

その時、春菜はそう言って空を見上げる。

確かに、雨が降り出したようだ。

小雨だが、じきに大雨になりそうだ。

「雨宿りできるところを探さんとやばいな」

まあ、替えの服はあるから、万が一にみず濡れになっても大丈夫ではあるが、できることならそういう事態は避けたいところだ。もし、近くに洞窟のようなものがあれば幸いなのだが……と思いつながら大次郎と春菜はあてもなく森の中を走っている。

次第に雨脚は強くなってきた。

日本のそれに比べると、雨粒一つ一つが随分と重く、大きいような感じがする。それほど土砂降りではないのだが、気が付くと、着ている服は上から下まですっかりびしょびしょになっていた。

「あ、あれ！ 洞窟じゃない！」

と、春菜が叫ぶ。

「まじでか！」

大次郎は心の中で「助かった」と叫び、春菜の指差す方角へと思いつき走り走っていった。

すると、そこには確かに洞窟が存在し、とりあえず大次郎と春菜はその中に飛び込んだ。それからまもなく、雨は土砂降りへと変化し、ザアザアと、けたたましい雨音がとめどなく響く中、二人はま

ず着替えに専念することにした。

男の着替えなど、一分から二分もあれば完了する。

脱いで着るだけなのだから、簡単極まりない。

が、逆に女の着替えはそう簡単にはいかない。基本的に、女性と付き合った経験もなければ、女兄弟も持たない大次郎にとって、女性の着替えが終わるのを待つのはこれが初めてのことだった。ゆえに、

「まだ終わらないのか？」

などと無粋な台詞を吐いたりしていたが、春菜は「ごめーん」と笑いながら、物影でそそくさと着替えに専念しているようだった。

しばらくして春菜の着替えも終わった。

案外、ラフな格好で、さらに髪の毛もポニーテールにまとめていたので、その見違える姿に大次郎は思わず驚いた。女とはかくも変幻自在な生き物なのか……と、感動する一方、これからどうしようかという切実な問題に思考力の全てを注いでいく。

「ね、いつそ、ここを仮の住処にしようか？」

と、春菜は言う。

「ここを？」

まあ、雨風は凌げる場所だ。

持ってきた工具を使って改造すれば、ある程度居心地のよい空間を作り出すことは可能であるかもしれないが、奈何せん、水源がない。近くに川でも流れていれば問題なくOKなのだが、もし川がないのであれば、再考せざるを得ない。

「ま、とりあえず雨があがってから考えようか」

大次郎は静かにそう言つて、その場にござりと寝転がった。

どうせ他にやることなどない。とりあえず雨があがるまで眠り、体力を回復させておいた方が得策だ……と大次郎は考えていたのだが、春菜は案外そうでもないようで、

「ねえ、どうせ暇なんだからトランプでもしない？」
と言って、リュックサックの中からおもむろにトランプやおセロ
など遊び道具を取り出したのであった。

第2話 不思議な不思議な島。

武田春菜、十八歳。

なぜ彼女が、このバカな大人たちのバカな計画に付き合っこの島に来たのか。それは謎。大次郎も深く聞く気はなかったし、春菜の方も自ら語る気はないようだった。

しかし、春菜が想像を超えて能天気な女だということは、大次郎にも分かった。

何しろ、この状況で、トランプ？

この女は、まさか遠足か、社会見学か、修学旅行か何かと勘違いしているのではなからうか。まあ、大次郎も学生時代、社会見学や修学旅行に行った際は、本来見るべき施設などろくに見ずに友人とトランプやウノ、オセロや将棋にうつつを抜かしていたものだが、今はそんな生易しい学校行事などではなく、生きるか死ぬかの壮絶なサバイバルゲームなのだ。

それなのに、

「ねえ、トランプやろうよ！」

と、春菜が急かしてくるが、

「あほか。寝てろよ。っていうか俺は寝るよ」

疲れもたまっている。寝かせて欲しいというのが大次郎の本音だった。

「寝るなんてつまんないよ。それに私は眠くないし」

「……じゃ、その辺の探索でもしてこいよ」

実に投げやりな、大次郎の物言い。

それに対して春菜はしばらく考え込んだ後、

「分かった！」

と言ってスクツと立ち上がった。

いったん眠ってみると、野宿と言うのもそれほど悪いものではないように思えてくるから不思議だった。

正直、日本という国で、無難に生まれ育ってきた大次郎には、野宿などという経験は全くない。彼は、夏は涼しく、冬は暖かい、まさに天国のような環境で育ってきた、典型的な文明人なのだ。

自然の音がなんとなく子守唄のように聞こえてくる。

騒々しい雨音さえ例外ではなく思えるのだから、不思議なものだった。

よく考えてみると、これだけ落ち着いた気持ちで眠りにつくことができるのはいつものことだろう。社会人になって以来、彼は本当の意味で眠ったことはないように思うのだ。夜眠っていても、翌日の仕事のことが気になる余り、上司や客から散々怒られる夢しか見ることができなかった。休みの前の夜は、まだ気持ちは楽だが、それでもその日しかした失敗や怒られた記憶が走馬灯の如く蘇ってきて、やはり落ち着いて眠ることができない。

休みの日の昼寝などもつてのほかだった。休みであろうと容赦なく鳴り響く携帯電話が気になって、眠りどころの騒ぎではなかったから。着信音が響くたび、心臓が止まるような緊張に全身が支配される。会社からではなかったときの解放感は異常である。

ようやく、ようやく眠れる。

そう思うだけで大次郎の顔は自然と綻んだ。時折、携帯電話を見てみるが、これが鳴り響くことはもう二度とはあるまい。前人未到の無人島で、アンテナがたつはずもないのだから。

今頃は、職場の人間はどうしているだろう。社則によると、三日連続で無断欠勤したら、問答無用でクビにするとあるから、クビになっているに違いない。まあ、あんな職場の人間のことなどどうでもいい。彼らが如何に困ろうが、知ったことじゃないのだ。問題は、家族だ。友人だ。彼らは、今頃何をしているだろうか。行方不明になった自分を案じて、必死に探し回っているだろうか。

しばらくして、

「大次郎、大次郎」

声が響く。

甲高い声。

妙に聞き覚えのある、不思議な声だった。

「起きてよ、起きなさいってば！」

思い切り頬を引っ叩かれ、大次郎は余りの痛さに飛び起きた。

「な、なッ……」

そこにいたのは、春菜だったが、女に引っ叩かれた経験など一度もない大次郎は困惑の色を隠せないでいた。

「ねえ、ちよつと来て！」

と、春菜は構わずに言う。

「なんだよ？」

大次郎が尋ねると、

「来てってば！」

彼女は何も言わずに彼の裾を引っ張っていく。

何事だろうと、大次郎の顔は疑問符でいっぱいだったが、とりあえず言われるがまま、彼女の後に従い洞窟の奥へと歩いていった。

しばらく歩き、そこで春菜は立ち止まる。

「ねえ、あそこが洞窟の外になるみたいなんだけど、あそこに変な動物がいるのよ」

と、彼女は言った。

「変な動物？」

まあ、ここは日本とは違う。日本ではお目にかかることができないような動物がいても全く不思議ではない。せいぜい、それが獰猛な肉食獣でないことを願うばかりだ……と、大次郎は思いながら、とりあえず好奇心に身を委ね、洞窟の外にいますという動物を御目にかかれる位置まで歩いていった。

すると、

「なッ……」

そこにいた奇妙過ぎる生命体に大次郎は思わず絶句した。

「ね、ねッ、凄いでしょ」

春菜は誇らしげに胸を張った。

「す、凄いつて……。あ、あれはなんだ？」

そこにいたのは、ライオン……のように見える巨大な鳥だった。より詳しく説明すると、ライオンの顔と牙と体を持つが、その頭からは立派な角が生えており、背中には巨大な羽が二つほどくっついてた。しかも、尻尾は、まるで蛇のような形をしている。

大次郎は余り世界の動物に詳しい方ではないが、それでも、あんな生物がこの世に存在するはずがないということぐらいは知っていた。もしいるとすれば、人間が科学的に作り出した場合だけ。

そして、その不思議な獣は、シマウマのように見える赤色と黒色の肌を持つ不思議な草食獣を喰らっている最中のようなだった。そこから勘案するに、彼らは恐れていた獰猛な肉食獣ということになる。まあ、ライオンの顔と牙を持っている時点で、想像できることではあったが……。

「逃げるぞ」

と、大次郎は言う。

もっと知りたいという好奇心も、あるにはあったがそれ以上に恐怖心の方が大きかった。これ以上近づけば、自分たちが、あの哀れな草食獣と同じ立場に追いやられるかもしれない。ここは、人間の管理の手が及ぶ動物園でもサファリパークでもないのだから。

「に、逃げるの？」

一方、事の重大性をそれほど理解していない風の春菜が、じろりと大次郎を睨んでくる。彼女は、恐怖心よりも好奇心を優先させる性質のようだった。

「ああ、逃げるぞ。殺されたいのか？」

大次郎は、例えば春菜が何を言おうとも、この場から急ぎ脱出する

つもりだった。

春菜はというと、なおも不服そうではあったが、大次郎がいち早く走り出すと、その後に従って走り出した。さすがに、単身、あの恐ろしい獣に近づいていこうという勇氣はなかったようだ。

そして二人は、洞窟を出る。

既に雨はあがっていて、空を見上げると、透き通るような青空が延々と広がっていた。

「……なんか不思議な島だな」

と、呟く大次郎に、

「面白い島よね」

楽しそうにカラカラと笑う春菜であった。

「面白い島ね。……全く、俺はお前が羨ましいよ」

「羨ましい？」

「ああ」

静かに頷く大次郎に、春菜は誇らしげに胸を逸らしてから、

「そっか。私が羨ましいんだ。じゃ、見習いたまえ！ はっはっは」

などと叫んでいたが、そんな彼女を見て、大次郎は思わず「はは

は」と笑ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2067z/>

異世界に行こう！

2011年12月7日23時47分発行